

巻頭インタビュー 水源の里へ思いを馳せる

地方の安心感が人を呼ぶ

哲学者・京都市立芸術大学学長 鷺田 清一さん



ウォークルポ

600人中70人が移住者

岡田中地区のむらづくり

京都府舞鶴市

特集

地方創生「首長勉強会」第3回

講師：藻谷 浩介さん、小田切 徳美さん、山崎 善也会長

水源の里のうまいもん

黒岩プリン

高知県佐川町

長野県王滝村

「セルフディスカバリーアドベンチャー
in 王滝 クロスマウンテンバイク」

開催日：5月21日、22日

大自然のなかをマウンテンバイクで走るスポーツイベント。コースは100km、42km、20kmの3つ。去年は全国から1,000名を超えるマウンテンバイカーが集結した。

地方の安心感が 人を呼ぶ

哲学者・京都市立芸術大学学長

鷺田 清一さん



Profile 鷺田 清一さん

哲学者（臨床哲学・倫理学）。1949年京都市生まれ。京都大学文学部哲学科卒業後、関西大学教授、大阪大学教授、大阪大学総長などを歴任。現在は京都市立芸術大学学長、大阪大学名誉教授、大谷大学客員教授、せんだいメディアテーク館長。朝日新聞の朝刊にコラム「折々のことば」を連載中。
【受賞歴】紫綬褒章（2004年）、第63回読売文学賞『「ぐずぐず」の理由』（2012年）ほか。

インタビューは改装中の学長室にて。壁面には卒業生によってフラスコ画が描かれる

笑って過疎に暮らす強さ

—私の一日は、朝刊のコラム「折々のことば」を読んでいます。選ばれる言葉も面白いですが、先生の解説には思わず膝を打ちます。

昔読んだ本を引っ張り出したりして、毎日連載しています。

—私たちは取材で限界集落といわれるところをよく訪ねますが、そこに住んでおられる人たちは必ずしも悲観的な表情ばかりではありません。飄々としてどこかユーモアさえ感じて、暗さが無い。先入観で見えてはいけなかつくづく感じます。

みなさんが冗談言ったり明るく見えたりするのは、今までそんなに豪華な生活とか、特別おいしいものを食べるとか、都会的な楽しみをしてこられていなくて……「今年はちゃんと収穫があるだろうか」「食いつないでいけるかな」というような、小さな心配とか苦労とともに小さな安心感を積み重ねてこられている。そういうことが根底にあるのではないかと思います。ある種「笑ってなければやってられへん」ときの笑いがうまく伝わってきている。「今まで何とかうまくやってきたし、これからもたぶん何とかやるよ」という生きる最後の力が笑いに繋がっているような気がしますね。

大きな喜びは求めない。「辛うじて今年もやれているのだからこんなありがたいことはない」という安心感かな。今の都市生活では体験できない何かがあると思います。消費することの喜びじゃなくて、今日もここに安らかにいることに感謝する気持ち。都市の日常では感じる事ができないですね。そういった気持ちが笑いであり、力になっているのだと思います。

—日々の生活で積み重ねてこられた生きる力がある。

そうですね。やっぱり、いくつになっても自分でしなければならぬことがあるというのが、すごく大事だと思います。1人の小さな暮らしであっても、食べものは用意しなくちゃならないし、便所の掃除もしなくちゃならない。都会では確かに介護サービスが充実していましたが、自分はここにどうしてもいなくてはならない人か？ というところとちょっと違うなど。むしろ自分が早く

くたばったほうがスタッフも楽し、家族も楽しんじゃないかと思っていたりする。「世話される人」という受け身の立場に追いやられている。自分はもういなくなったほうがいいやろな、と思っている人が都会には多い。

でも過疎の村では、サイフは小さいけれど自分のことは自分でして、自分に何かあったら助ける人は自分しかいないし、自分がここにいることにちゃんと意味がある。また自分が隣人を手助けすることもできる。そういう自分がいて、みんなもここにいて欲しいと思ってくれる場所がある。これが人を支える力になっていると思います。

—生活に張り合いがあるんでしょうね。地域に行くと、ひそひそと楽しい空気が湧いてくる感じがします。

ふてぶてしいと言ったら悪いけど、笑いながら過疎での暮らしができるしたたかさというか、強さがあるんですよ。

—先生のお話を聞いていて共感したのは、限界集落はむしろ楽しさに溢れているということ。地域や集落再生の成功例を見ていると、共通したパターンはなく、みんなそれぞれです。パターンや数値目標を作ってパッとかぶせようとするのはちょっと違うなと思います。

キーワードは笑顔です。達成度がどうか、数値はどうでもいい。それよりも笑顔がどれだけあるか？ 笑顔がたくさんあったら成功っていう、シンプルな基準で見たらいいですね。

「安心」を求めて地方へ

—最近のUターンやIターンの動機が、単に農業をやってみたいということだけではなくなっているように感じます。定年退職してから来られる人も若年退職して来られる人も、その価値観や目的が今までとちょっと違うようです。

それは「自分で自分たちのことをちゃんとしないとヤバイぞ」という危機意識があるんだと思います。つまり国とか役所に頼るだけではヤバイぞと。原発事故が起こったときはどうだったか。今はみんな忘れてるけど、もし西日本でも起こったら、京阪神の人は他の所へ行か

んならんでしょ。水も飲めんし、東日本にも逃げられへんでしょ。列島から離れなきゃいかん。そんなときに今みたいに全部国に頼っていて、税金とかサービス料を払って世話を焼くという仕組みではもう持たんぞと。

だから極端な場合、難民になってもちゃんと生きていくためには何と何が必要か、考えておく。いざとなったら自分らで食材を確保できる、下水道がグチャグチャになってもちゃんと排泄物の処理ができる。そして、力を合わせて子どもを育てられる、会社が潰れてもちゃんと自力で生きていける仕組みを持っている。今ある流通システムに依存しないで、野菜などの調達ルートを自分で持っている、そういう生き方をしないと危ないんじゃないか。「明治以降の日本の社会システムではヤバイぞ」ということだと思います。

——今までにない社会の仕組みを求めているということですか。

地方に行ったら、いくつかの社会的なアクシデントを避けられるじゃないですか。食べ物を分け合うとか、子どもを隣の人にちょっと見てもらうとかができます。特に若い世代だったら、誰かに何かを頼めることの安心感はあると思うんですね。昔の村みたいにベッタリひっついていてではなく、適度な距離を置いて、お互いのプライバシーを保ちながら、そんなめちゃくちゃに介入せず、一番大事な子育てや食べること、働くことの面では助け合う。自分がアウトになっても「助けて」と言えるような、生き延びるネットワークを持っていることがこれからの社会、時代にどれだけ安心になるかが、身に染みてきているのではないのでしょうか。

——Iターン・Uターン組には、地域再生の起爆剤としても期待が寄せられます。

あえて会社で雇われている安定した生活を捨てて来られる、定年になったけれども「もうちょっと頑張れる」という人たち。知恵もあるしIT能力もあるし、志もポジティブ。そういう人たちと過疎の村の組み合わせは、希望があると思います。

でも一気に成長とかそんなこと考えなくていいんですよ。ささやかでもここに来て良かったな、子育てにとっても良かったなって思えたら。老後を心配しない生活、



定年がない生活っていいじゃないですか。死ぬまで仕事や役目がある生活。過疎をプラスに語ることができると思うし、島根県の海士町とかはそれがうまくできている例ではないでしょうか。

“ジカタ”創生

——時代の流れを受けて、大学も地方に目を向けようというところが増えたように思います。

地方の国立大学が地域再生をテーマにしたカリキュラムを組んだり、学部を新設したり……あれは大学が生き延びる方策なんです（笑）。国から補助金を受けるための。

北大から九大まで旧帝国大学という大きな大学は次々とプロジェクトを組んで予算を取れます。ところが地方大学は学部も少ないから1つプロジェクトを出したら、次の年はもう出せない。補助金は取れないし、外部資金も入ってこない。そういうときに大学が生き延びるためには、地域のためにこの大学があるんだと示さなければならない。それで地元で足場を置こうとしているんですね。

地域のための文化や教育は本来、県立大学や市立大学がすることです。国立大学は全国レベルの教育をするための大学だった。ところが地方にある国立大学は予算的にやっていけなくなってきたので地方重視と言い出して

いる。公立大学と国立大学の教育が完全にかぶるようになってしまいました。

——「地方創生」という言葉も象徴的です。

まず僕は「地方＝チホウ」って呼び方はやめた方がいいと思うんです。「ジカタ」と言ったほうがいい。元々は、「地方＝チホウ」という言葉はなくて、「町方＝マチカタ」と「地方＝ジカタ」だった。マチカタは、工業生産や商いをするけど、食材とか生きるために大事なものは全部ジカタが作ってくれる。昔の暮らしは、マチカタとジカタが協力して初めて成り立っていた。ジカタが作って、マチカタが消費するという、持ちつ持たれつの関係があったんです。お金もマチカタからジカタに流れていた。

地方を「チホウ」って呼び始めたのは明治以降。地方の対立語がなにかというと、中央なんです。東京を中央としてどうのこうのと対峙して、自分らのことをチホウって呼ぶのはもうやめたほうがいい。中央集権の時代は、知事を自分たちで選ばなかった。中央から派遣されたので、中央と地方。でも今は知事も自分たちで選んでいるし、もう地方じゃないんですよ。地方の過疎地域のジカタと、街中のマチカタが行き来する。街と過疎地が持ちつ持たれつの暮らしを考えると、「ジカタ再生」「ジカタ振興」って言ったら気分がいいじゃないですか。ほんとうに「地方創生」をやるんだったらチホウという呼び方はやめるべきだと思います。



インタビューの終盤、「ダジャレ思いついた（笑）。地方（ジカタ）+美しい＝地方美（ジカタビ）」と鷲田さん。カッコいい地下足袋を履いている職員がいると呼び寄せてくれた

Close-up

京都市立芸術大学

日本初の公立の絵画専門学校として1880年に開設された京都府画学校を母体とする日本で最も長い歴史を持つ芸術大学。1952年に同じく日本初の公立学校として設立された京都市立音楽短期大学と1969年に統合。京都市立芸術大学となった。

美術と音楽を両軸とし、建学以来130年以上にわたって、国内外の芸術界・産業界で活躍する優れた人材を輩出。百余年の歴史をもつ美術学部は、日本画の上村松園氏、山口華楊氏などの文化勲章受章者をはじめ、美術の各分野において数多くの文化功労者や人間国宝を輩出している。

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA (アクア)

2010年春、京都堀川音楽高等学校の新築移転に伴って、堀川御池ギャラリー内に開館。ギャラリー学芸員の企画による特別展のほか、京都市立芸術大学の研究成果発表展ならびに教員・在学生・卒業生による企画展が行われている。

@KCUAはKyoto City University of Artsに場所を示す@をつけたもので音読みをすると、ラテン語で「水」を意味する「アクア」。生命を養う水のように、芸術が人々の暮らしに浸透し、創造力豊かな社会に貢献するという大学の理念が表現されている。

開館時間／11:00～19:00

(最終入館 18:30)

休館日／月曜日(祝日の場合は翌火曜日)

入場無料

所在地／〒604-0052

京都市中京区押油小路町238-1

TEL: 075-253-1509

FAX: 075-253-1510

MAIL: gallery@kcua.ac.jp

600人中70人が移住者

岡田中地区の むらづくり



まいづる
京都府舞鶴市

【取材・文：岩岡 廣之】

西方寺平集落（標高250m辺り）からの眺め。早朝には雲海が見られるという

若返った雲の上の集落

集落の人口32人、そのうち1ターンUターンが6家族20人。9人いる子どもは全員が小学生以下で、集落の平均年齢は40歳そこそこ。そんな集落が京都府北部の舞鶴市にある。まちの中心部から車で約30分。海とは反対側、山の中腹に位置する「西方寺平」。舞鶴市岡田中西方寺地

区の中で一番奥地にある集落が、若者が住みつむらとして20年程前から注目されている。利便性や農地の広さなどから考えると決して恵まれているとは言えない環境で、1ターンやUターンの人たちによって地域が活性化しているのは何故なのか？1月中旬、その西方寺平を訪ねた。

岡田中西方寺地区に入り、さらに細く急な坂道を車で走ること4km

で西方寺平に着く。宮津市との境に位置する赤岩山（標高669m）の南側の中腹、200mから300mの斜面に、棚田や農家、養鶏場、ビニールハウスが点在する典型的な農村風景が広がっている。一番高いところに建つ赤い屋根の古民家は、田舎暮らし体験ができる宿泊施設「雲の上のゲストハウス」。地域のシンボルになっている。



舞鶴市はこんなまち

人口84,140人、面積342km²。日本海側で唯一、海軍鎮守府が置かれたまち。平成27年10月、舞鶴引揚記念館所蔵の資料がユネスコの世界記憶遺産として登録された。市街は大きく2つに分かれて発展。軍港から発展した東舞鶴と、田辺藩の城下町・商港から発展した西舞鶴。そして、周辺部にリアス式海岸の半島部に農漁村が点在する大浦地域、1級河川由良川沿いに農村が広がる加佐（かさ）地域があり、ひとつの市に多彩な顔を持つ。舞鶴湾が一望できる五老スカイタワーからの眺めは「近畿百景第1位」に選ばれている。



雲の上のゲストハウス

所 京都府舞鶴市西方寺 1132

TEL 0773-60-2317

営 要事前予約、食事は自炊形式

HP <http://ghcasa.web.fc2.com>

宿泊のほか長期滞在や半日などの休憩利用も可

ゲストハウス運営委員会やむらづくり委員会の会長の務める霜尾共造さん。家族経営で養鶏のほか、米・有機野菜を育てている

この集落で暮らす専業農家の霜尾共造さん（37歳）はUターン組だ。霜尾さんによると、「外から人を呼び込み集落を活性化しよう」と活動を始めたのは、霜尾さんの父、誠一さん（67歳）。高校から地元を離れていた誠一さんが帰郷した約40年前、すでにむらの人口は減少し始めていた。

「このままでは集落の将来がまずい！」と、1人で活動を始めた。今は70～80代に到達している住民も当時は30～40代で、バリバリ仕事をしている人ばかり。「よそ者に来てもらわなくてもいい」という風潮があり、風当たりは強かったそうだ。それでも誠一さんは諦めなかった。霜尾さん親子は「神を愛し、隣人を愛し、土を愛する」という教育理念を持つ、三重県の愛農学園農業高校の出身。「父の頭には高校で学んだ教育理念があったのではないかと共造さんは話す。

活動を始めて約15年後、やっと1組の1ターン者の獲得に成功。しかし、その人は長くは続かなかった。よそ者として扱われ、地域の人たちに受け入れてもらえなかったのだ。この頃の西方寺平がどれほど過疎化

していたかを表わすエピソードが。共造さんのお母さんがお嫁に来て以来、次に迎えたお嫁さんはなんと共造さんの奥さんだったそうだ。

少子高齢化でいずれ廃村になる。この現象を限界集落と呼び、社会の注目を集めるようになったのは今から15年程前。この頃の西方寺地区はすでに、若い移住者が多いと近隣市町村の注目を集め始めていた。

足がかりとなったのは、1人の新規就農者だ。1組目の1ターンの受け入れに失敗した誠一さんだが、その後も雑誌『百姓天国』に投稿するなど地道な活動を続けていた。その人は誠一さんの記事を読み、西方寺平を訪れて移住。地域にも馴染んでくれた。

西方寺平集落を含む西方寺地区への1ターン者は、近畿、中部、関東の出身者もいる。ここに来て、25年前の教訓が生かされたかと共造さんは言う。移住者が多いことが話題となり、他の限界集落からの視察を受け入れるようになると、これまで頑なに拒否していた住民がその重要性に気付き始めてくれた。移住者が1割を超えるとこれまでにない出来事も起こる。西方寺平に17年ぶりに

赤ちゃんが誕生したのだ。昔ながらの村に変化が生まれた。

共造さんはもうひとつ、地域ぐるみで取り組む活性化の秘訣を教えてください。1ターンやUターンした人は、田舎での暮らしに希望を持ってやって来る。一方で地元の若者はどうしても田舎を否定的に考えがちになる。そこで徹底して両者の交流を重ねた。地元の若者の考え方が変わる要素のひとつとなり、地元住民、移住者などの隔てがない、現在の形が出来てきたのだという。

1ターンし“半農半公”

大阪府出身、京都市でサラリーマンをしていた布施直樹さん（42歳）は、16年前にこの地に移住した。若い時から漠然と「自給自足の暮らしがしたい」という思いがあり、京都府の主催する農業体験に参加。勤めていた会社が統合するのをきっかけに一念発起、移住を決意したという。自宅は環境に惚れ込んだ西方寺平に決めた。空き家が見つからずに困っていたところ、誠一さんに「建てたらいいんや」と声をかけられたとか。

舞鶴特産の万願寺とうがらしやイチゴなど、2年間の農業研修を経て就農。西方寺平は農地が少ないので、田んぼや畑は山を下りた場所に。本格的に農業を始めて14年になる。

準備を整え、さあこれからと思っていた矢先、近畿地方に台風が襲来した。平成16年の23号台風（氾濫した由良川で37人を乗せた観光バスが立ち往生した台風と言え思い出されるだろう）。布施さんが1人で建てたビニールハウスは強風により全滅。保険に入っていなかったが、地域住民が力を貸してくれ、1棟はすぐに立て直すことができた。残り2棟は再び1人で5か月をかけて復旧させた。農業の厳しさを教えられたという。「当時から何でもやりました。地域の事務を請け負い、新聞配達もやっています」と布施さん。

布施さん自身、思わぬ出来事に遭遇する中でも、NPOに加わったり、農家の経営を考える農業経営研究所を作ったりするなど探究心旺盛だ。主軸は農業。紅ほっぺや章姫など大粒のイチゴをハウス栽培している。「将来は、いろんな品種のイチゴを育てて食べ比べ出来るイチゴ園にするのが夢です」と話してくれた。平

成21年から始まった京都府の農村再生事業「命の里」では、京都府内に8人いる「里の公共員」の1人として活動している。高齢化が進む地域の問題を解決する取り組みの実践者として、いわば農業をしながら地域活性化を実現する案内員だ。「半農半公です」と現在の仕事ぶりを紹介してくれた。

雑誌などのメディアでは、田舎暮らしに憧れる人に対して、「自立できる手段や特技を持っている」「田舎独特のルールを理解する」など、数々のノウハウが紹介されている。

これに対してIターンの先輩である布施さんは、次のようなアドバイスをする。「新規就農者はその条件をどうしてもクリアしないとダメだと考え、自分で田舎暮らしのハードルを高くしてしまっている。現地に来て、過ごしてみながら生活を整えていくのもひとつの方法です」。これは集落側にも言えることだという。「Iターン者への過度な期待や条件づけは負担になってしまいます。赤ちゃんみたいなものだと思って温かく見守りたい」。布施さんは自身が地域に受け入れてもらった経験を土台に、新規就農者の受け入れにも力を注いでいる。

小さなビジネスを生む

舞鶴市の岡田中地区は、一昔前であれば小学校の校区にあたる（岡田中地区は西方寺平集落を含む西方寺地区など8地区からなる）。現在、人口は大幅に減少し、およそ600人。このうちIターンによる移住者が70人を超えた。ここで1月末、岡田中むらづくり委員会主催のイベントが開催された。この集まりの目的は「中山間地・岡田中に小さなビジネスを生み出すための試み」と明確だ。「1人では出来なくても、何人かが力を合わせれば何か生み出せるのではないかな？」地元にある農産物を使って新たな特産品を作るビジネスを探るのである。

この日は男子会が開発中の「岡田中特製 男ラーメン！」第2回の試食会が行われていた。参加した男子は40人弱で、年齢は30～60代。他の田舎の集まりに比べて格別に若い。メインのシェフは14年前に大阪から移住してきた高坂茂佳さん（50歳）。鶏ガラスープ、イノシシ肉のチャーシュー、味付け玉子は自家製。飲食関連の仕事をしていた手腕が役立った。



試食会はお酒の持ち込みOK。気兼ねない空気のなか箸が進む



試作第2弾の「岡田中特製 男ラーメン！」



この日はむらづくり委員会で約40食のラーメンを作った

「ラーメンは特産品になるのか？味は、食材はこれでいいのか？」様々な意見が飛び交った。経費は人件費を除き1杯367円と原価計算がされていた。まずはどこかのイベントで出店を目指すそうだ。

このイベントでは、今年の春に岡田中に移住してくる田中友志さん（38歳）も紹介され、「自然を使った暮らしを目指します」と決意表明していた。彼をこの地に招いたのは、Iターンのメンバーだ。

男子ばかりではない。料理や手芸など農村女性の持つ特技を生かして、女性が活躍出来るビジネスを探る女子会も企画されている。

春には布施さんが管理人を務める

雲の上のゲストハウスで、「おいおいでよ 岡田中」と題した1泊2日の田舎体験イベントを開催する。田舎暮らしを覗いてみませんか？と呼びかけ、山菜採りや農業体験などを企画している。「すぐに実現しなくても、ここでの生活に触れてもらうことが田舎移住の第一歩」なのだという。

住民間のつながり、イベントを介した地域外の人との出会い、人々との繋がりが新たな移住者を呼び込んでいる。40年前に始まった舞鶴市岡田中地区のむらづくりは、着実に成果を上げているようだ。

そしてこれからも、諦めない住民たちが引き継いでいく。

移住受け入れや交流の拠点

おじょうやうえのけ
大庄屋上野家

江戸時代後期の建築で、屋敷や土蔵は国の有形登録文化財、書院作りの庭は京都府の指定文化財に登録されている。茅葺の主屋は地元食材を使った農家料理レストラン（完全予約制）として活用。長屋は移住定住促進や田舎体験事業、地域情報の発信を行う、舞鶴市の加佐地域農業農村活性化センターとして整備されており、地域おこし協力隊も配置されている。



舞鶴市加佐地域
農業農村活性化センター

所 京都府舞鶴市西方寺 285
Tel 0773-60-8200
営 8:30～17:15
休 水曜
HP <http://www.uenoke.com/>

古民家レストラン

Tel 0773-83-1339
営 木曜～日曜 12:00～15:00
前日夕方までに予約を
メニュー／月替わりのランチ
1,300円（税込）



上／布施さんの育てる大粒のイチゴ
左／布施直樹さんは16年前に移住。一目見て気に入った西方寺平に居を構えた



意見交換の時間になると一転真剣な表情に。厳しい意見も飛び交った



日本総合研究所主席研究員の藻谷浩介氏

地方から始めるニッポン・イノベーション！

里山資本を生かし若者を呼び戻す

当協議会が今年度、3回シリーズで企画した首長勉強会（協力・時事通信社、後援・内閣府、総務省、農林水産省、国土交通省）の第3回を11月14日、東京・東銀座の時事通信社で開催した。この日は日本総合研究所主席研究員の藻谷浩介氏が講演した後、3回連続登壇となった小田切徳美・明治大学教授の司会で、山崎会長と藻谷氏が対談。北海道から沖縄まで全国40自治体首長など50人が参加した。

藻谷浩介氏講演

空き家対策のライバルは東京・大阪

藻谷氏は「豊かな里山資本を生かした水源の里の再生」と題して講演した。藻谷氏の持論は「事実を見ること」。巷で言われていることがいかに事実と異なり、メディアや評論家が広めるムードやイメージに左右されているかを、データとともに力説した。

例えば「限界集落」という言葉。「絶滅危惧種」という言葉もあるが、絶滅危惧種とは年を取った個体が多いからそういわれるのではなく、子どもが少ないから。「日本で大人の人数に対して最も子どもが生まれていないのは東京。生物学的には、地方よりはるかに東京の方が限

界です」

社会問題化している空き家対策についても、47都道府県の空き家率（2013年発表）のグラフを示して注意喚起した。空き家率が一番高いのが山梨県、次が長野県。一番低いのは東日本大震災で多くの家が流された宮城県で、次が沖縄県。しかし、絶対数の最多は東京都、次は大阪府、神奈川県、愛知県と続く。

東京や大阪から地方へ来て空き家を借りたいと希望する人が増えているが、「仏壇があるから貸せない」などと断られる。「そういう人は二度と来ません。だって東京と大阪だけで空き家が150万軒以上もあって、8割は市場に出ている。空き家対策に悩む地方のライバルは、実は東京や大阪なのです」

高齢者数は高止まりし、子どもは減り続ける

続いて年齢階層別人口推移のグラフを示し、少子高齢化問題の要点はどこかを語った。現役世代が20年前から1,000万人減る間に65歳以上が1,600万人も増えたので、人口が減ったとの印象はあまりないが、子どもは400万人減っている。高齢者は増加傾向こそ止まっても、減りはしない状態が続き、その間に子どもが減り続ける。

藻谷氏はよく使われる「高齢化率」には意味がないと指摘する。今年の都道府県別高齢化率は東京が23.1%で、一番高い島根県は32.7%だが、バブル期に東京は10.5%、最も高い島根県が18.2%だった。

「率」がみんな同じように増えただけだが、絶対数が違うため、後期高齢者の「数」が最も増えているのは首都圏。「地方が消滅すると言われますが、4人に1人が高齢者の東京はまだ元気。ということは、皆さんのまちもまだ元気。物事は率でなく絶対数で見ないと駄目です」と強調した。10年後には団塊の世代が75歳を超え、首都圏の後期高齢者は250万人増える。藻谷氏は日本版CCRC*について「移住先として41市が挙げられていて1,000人ずつ移すとしますが、250万人のうち4万1,000人。ほとんどないに等しい」と断じた。

高齢者数の増加も、現役人口の減少も全国的に同じことで、東京の方が深刻だという。すなわち都会でも地方でも「大丈夫な地域をつくらなきゃいけない」として、島根県邑南町のケースを紹介した。同町の2010年の年代別人口をみると、当時どの年代よりも「85歳以上」が最も多かったが、近年の合計特殊出生率は12年に

※日本版CCRC
健康なうちにある地域に移り住み、介護が必要になっても同じ場所に住み続けることができるコミュニティや施設を整備する。これにより、高齢者の地方移住を促進しようという構想



グラフを示しながら少子高齢化問題の要点を説く藻谷氏

2.65、13年は1.72、14年は2.07と推移している。

藻谷氏は止められないこと・できることとして、「住民が1歳ずつ年を取ること」「(多くの)若者が地域外へ就業して出て行くこと」は止められないが、「今まで出て行って戻ってこなかった若者を呼び戻すこと」「子育て支援で出生率を上げること」はできると訴えた。そしてそれらを可能にするのが「地消地産」、「人口と天然資源の循環再生」などを重視した「里山資本主義」だという。



現役世代の人口に対する子どもの人口をグラフ化した「人口成績表」で、自らのまちの現在位置を予測し手を挙げる参加者

子育て支援は「親」ではなく「子ども」単位で

次に、この日の参加市町村の状況をグラフ上に表した力作の「人口成績表」を示した。自然増減率を縦軸、社会増減率を横軸に取ったグラフでは、多くの市町村が自然減のゾーンにあるが、社会減も重なったゾーンにいるのか、頑張っただけではできていないのが一目瞭然。ともに増えている優等生の市町村もあり、参加者が自らの「現在位置」を自覚するよう促した。同様に、65歳以上人口の増減率を縦軸、15～64歳人口の増減率を横軸に取った「成績表」と、子ども1人当たりの現役世代の数を縦軸、0～14歳人口増減率を横軸にした「成績表」も示した。

子ども1人当たりの現役世代の人数をみると、昭和60年代は平均3だったのが今では4.8に上り、8を超えている市町村もある。「3ぐらいでない生態系としてはおかしい。一人っ子政策を続けてきた中国でさえ4.0ですよ」と藻谷氏。少子化対策については「みんなが結婚して子どもを2人ずつ産んだ時代なんかありません。人口が増えたのは3、4人きょうだいがいたから」と指摘。子育て支援を世帯や親ごとに考えるのは誤りで、「子ども1人1人に対して支援し、4人5人と産んでも子どもが路頭に迷わないようにするべき」と語った。

3者対談

水源の里がまちの新たな魅力に

後半は小田切教授の司会で、山崎市長が綾部市の取り組みを紹介し、藻谷氏がコメントしながら語り合った。

京都府北部に位置する綾部市は面積約347km²、人口約3万3,600人。高齢化率が35%を超え、65歳以上が半分を超す「限界集落」は全集落の約1/4を占めている。そこで前市長時代の2007年に「水源の里条例」を施行。10年に就任した山崎市長が引き継いで取り組みを進めてきた。

綾部市は毎年ざっと500人が亡くなって250人が生まれる。高校生は240人卒業して2割が残り、8割が出て行って3割戻るのでマイナス120人ほど。自然減と社会減で毎年300～400減ってきた。65年前の市制施行当時、5万4,000人いた人口と現在の人口を比べると計算が合う。

山崎市長は言う。「人口減はすぐには止まらない。ただ、65歳以上の人口は今年がピークで来年から減る。病院や介護施設は増やす必要がない。現役世代を呼び込めば持続可能になる」。社会減を食い止める施策の成果が徐々に表れ、「去年はマイナス51人。もう少しで今年あたりプラスかトントンになれば」というところまで来た。

水源の里条例とは、高齢化率50%以上などの条件に該当した集落を「水源の里」に指定し、①空き家活用や定住促進住宅の建設と定住者の生活支援②都市との交流人口を増やす事業を行う③特産品開発の支援④携帯電話不感地域をゼロ、ブロードバンドを全世帯に引くなど通信環境を整える——などの施策を進めるものだ。

初めは5集落をモデル的に指定し、5年の期限を設定。



水源の里条例など、綾部市の取り組みを説明する山崎市長



特産品の黒瓜畑。水源の里の指定を受け、地域の特産物を商品化

成果が出なければ打ち切るつもりだったが、「水源の里」だけで22世帯52人が転入した。13人が21人に増えた集落もあり、現在は「水源の里」を14集落に広げている。「行政が関心を持ってくれた」「マスコミや視察も来て、自分たちは見捨てられているのではないという気持ちになった」と言う住民が増えた。

転入者には田園回帰や価値観の多様化といった潮流が感じられ、「自分の人生をここでデザインしようという若者が増えている。仕事も、以前は行政がハローワークで世話しないといけなかったが、自分でレストランを開くとか、『半農半X』のライフスタイルも出てきた」という。

藻谷氏はまず、綾部市の特徴を「面積が広く、入り組んだ谷の奥に多くの過疎集落がある。同時にグンゼや日東精工、オムロンの工場、京セラ関連会社の工場などがあるハイテク工業都市でもある。中心市街地があって都会に近い人たちの問題もあれば、隔絶された農村集落の悩みもある」と解説した。そうした市ではとかく中心地を元気にする施策を進めるが、「ハイテク産業の拠点は機械化が進むからむしろ人は減る。そこで綾部市は水源の里に光を当てた。だから、中心地しかない綾部市だったら移って来なかったタイプの人たちが来ている」と評価する。

このことは地方創生論議で取り上げられる「コンパクトシティ」の考え方も関係があり、山崎市長は現在の議論を「原理主義的に1か所に集め、水源の里的な所は切り捨てるという乱暴な意見もある」と見ている。それに対し、綾部市が目指すのは「地域クラスター」の考え方。「クラスターとはブドウの房という意味。地域が一つひとつの実。それぞれが魅力ある実で育つことで、ブドウ(=綾部市)としての価値を上げていきたい」

そのために府と協調して都市計画の見直しを進めている。中心市街地以外の多くが調整区域で、移住者が家を



水源の里に指定されている集落。川に添うように畑・家が並ぶ

建てたり店を開いたりできなかったが、2016年度から線引きを廃止する。「今さら乱開発するつもりはない。地域の拠点づくりには必要。パソコンで言う基本OSをきちんと見直さないとどんなアプリも動きません」と山崎市長。

空き家物件を動かす一手

続いて小田切教授が空き家対策について尋ねた。

綾部市には空き家調査によって活用できそうな物件が600軒、住みたい人も600世帯。ところが市長就任当初、貸したり売ったりしてもいいという物件はわずか8軒。「このギャップに衝撃を受けた。需要がないから空いているんだと思っていました」。空き家を手放さない理由は「盆と正月には帰る」「親の家財道具や仏壇がある」「譲渡した相手の変な人だと近所から文句を言われる」など。そこで、仏壇や家財整理のために5万円の報奨



小田切徳美教授(左)、藻谷浩介氏(中)、山崎市長(右)

金を出した。

さらに流動化を促すため、物件を市に預けてもらい、市が300万円までをかけて水回りなどをリフォーム。都市部からの移住者に賃貸住宅として提供する制度を創設した。家賃は月3万円。10年住んでもらえれば改修費用を回収できる計算になる。そのうえで10年後に家主が引き続き貸すか、自分が住むかを選べる権利も与えた。これなら結論をすぐに出さずに済み、水回りも改修してくれ、人が住むのでリロケーションにもなる。

物件が動き始めた。売りたい人も出てきたが、次の課題は金融機関。就労実績のない移住者に銀行は貸してくれない場合もあるので、市が連帯保証人になる制度もつくった。金利も通常より低く設定。「議会には、10人は夜逃げしてもいいように債務負担行為を承認してもらった。でも、夜逃げはまだ出ていません。そこまでやるのかと言われてれば、そこまでやるんです」と山崎市長。

定住交流部も設置し、移住希望者が心配する住宅、仕事、子育てなどの生活のあらゆる問題にワンストップで対応する体制を整えた。縦割りの弊害が移住希望者の意欲をそがないようにするための工夫だ。若い女性の移住希望者が増えていることにも着目。看護師の資格を持つ人に、半分は資格を生かした仕事、半分は地域活動といった生活ができるよう支援するほか、3、4人で空き家をシェアしながら、孤独を感じずに住み始められる提案も検討している。

若年層には田園回帰の兆し

田園回帰の空気は子どもたちにも出てきた。地元の中

学3年生に綾部に住むことに関して質問を投げかけると、残りたいという生徒が1割、一度は出たいが帰ってきたい生徒が6、7割、戻らない生徒とまだ決めていない生徒が2、3割だという。若い世代は都会だけが豊かではないことに気づき始めている。

しかし、親が抵抗勢力になっている。「特に団塊の世代あたりまでは、田舎より都会の方が豊かになれるという画一的な価値観があり、『お前は東京で羽ばたけ』と言って送りだし、Uターンしてくると何か失敗したかのように捉える」と山崎市長。小田切教授は「誇りの空洞化でしょうか。親世代に誇りの再建をしてほしいですね」と語った。親世代の意識を変える取り組みが必要だろう。

小田切教授は、農山村の中でも出生率に開きがあることについて、藻谷氏に見解を求めた。

藻谷氏は「地方間の方が差が大きい」として、その要因を、子どもは個人ではなく社会や地域で育てるものという空気がある。出産に対するハードルが低い地域と、子どもは個人の責任で育てるものという考え方の地域との間で開きがあるのではないかと語った。

質疑応答

質疑応答では岡山県真庭市の太田昇市長が、広域合併で生まれた市が地方創生に取り組むうえでの悩みを語った。「旧村単位がいいのか集落単位がいいのか。大きいところの優位さは、まち全体の力を集中することができる。今は小さな里山資本主義と大きな産業政策的資本主義と、両方取り組むのいいかと思いますが……」

藻谷氏は「旧村や集落単位で意欲を喚起できればパフォーマンスが上がるが、全て元気が出るわけではない。頑張っているところをフィーチャーして、その次に頑張っているところは、子育てを頑張っているとか、爺ちゃんが元気だとか、いい点をフィーチャーして示す。優先的に支援して育てざるを得ないのでは」と答えた。藻谷氏は、林業のまち真庭市が取り組む「バイオマス発電」や、市全域で給食にジャージー牛乳を提供していることなどを挙げ、広域合併の効果も評価した。



質疑応答では、広域合併や就労対策など共通する悩みが語られた

山崎市長は、昭和の合併で1町12村が集まってできた綾部市では65年たっても旧村意識が強く、今もそれぞれに自治会連合会、消防団、学校などがあることを踏まえ、「12のクラスターを育てる方向を求め続けたい」と語った。少子化で児童・生徒が減少しているが、旧村同士の学校統合だけではなく、小・中一貫校化を進めているという。

次に兵庫県神河町の山名宗悟町長が「空き家対策は同じようなことをしているが、現役世代に来てもらうにはやっぱり仕事が課題」として、綾部市の状況を尋ねた。

山崎市長によると、移住希望者の年齢層は主に、退職前後の世代と、自然の中で子育てをしたい30代に分かれる。若い世代には工業団地への就職をハローワークで紹介するほか、就農希望者には第3セクターの農業生産法人などへつなぐ支援をしている。最近は農家レストラン、農家民宿、あるいは農業をしながら陶芸や翻訳、設計などをする人も出て来たという。

最後に小田切教授が「今日は、地域は変わるということ強く感じた。まちづくりの基本となるOSとアプリの話など心のこもった政策を聴けました」とまとめ、地方の奮闘に期待して結んだ。

写真提供・一部を除き時事通信社

本誌に関する
お問い合わせ、
ご連絡先は

▲全国水源の里連絡協議会 水の源編集委員会

綾部市役所 定住交流部 水源の里・地域振興課 〒623-8501 京都府綾部市若竹町8番地の1
TEL: 0773-42-4271 FAX: 0773-54-0096 E-mail: suigen@city.ayabe.lg.jp
http://www.suigenosato.com/index.htm

定期購読のお知らせ

『水の源』が年4回お手元に届きます。年間購読料:1,000円(送料込)
お申し込みは、上記の電話、ファックス、メール、HPから



文旦リキュールが香る、上質濃厚プリン

黒岩プリン

420円



高知県佐川町

面積100.8km²、人口13,427人。商家住宅や酒蔵など、江戸時代に城下町として栄えた風情ある街並みの上町地区、映画のロケ地にもなった急峻な土地に家々が立ち並ぶ尾川地区など、地域ごとの特色が色濃く残る。「日本植物学の父」と称される牧野富太郎博士を育んだ自然豊かな地は、古くから「桜のまち」としても知られている。

黒岩じるし

プリン通販可。ご注文はHPから。お問い合わせは下記メールへ。

HP <http://kuroiwa-jirushi.com>
E-mail kuroiwa-jirushi@gmail.com



今回お取り寄せした「黒岩プリン」は、高知県佐川町黒岩地区からの一品。地鶏卵の卵黄のみを使用した贅沢なプリンです。

製造するのは全員が農家で構成されている加工グループ「黒岩じるし」。お茶やイチゴ、新高梨、かんきつ類の一種の文旦など、農業が盛んな黒岩地区で、旧村名「黒岩」の名を広めること、所得を向上させることを目指し、2010年に結成されました。代表を務めるのは元調理師で文旦農家の村田さん。長年お菓子作りを趣味にしているメンバーのレシピを基に妥協のない製品作りを心がけています。地元産の牛乳や果実を使った手作りスイーツの数々は、今では20種を超えました。

しかし、主力商品のプリンには「全国どこにもある」という悩みも。そこで、ここでしか作れない特色のあるプリンをと、地元の上質素材にこだわり抜いた「黒岩プリン」が誕生しました。味の決め手となる卵は、平飼いの地鶏卵。新鮮な卵と牛乳から作られるプリンは、濃厚ながらも後味はすっきりとしています。カラメルは合わせずに、文旦リキュールをアクセントに。文旦独特の爽やかな香りとほんのり苦味を感じる、風味豊かな味わいです。ふるさと納税のお礼商品に選ばれたり、1日限定のカフェを開いたりするなど、年々知名度は上昇し、活動も拡大。黒岩じるしは農業にスイーツ作りに走り続けています。

読者プレゼント



※季節の素材を使用しているため、内容は写真と異なる場合があります。ご了承ください。

黒岩プリン詰め合わせ(6ヶ入) 1名様

●アンケート

- Q 1. 面白かった・関心を持った記事
- Q 2. 今後取り上げてほしい内容
- Q 3. 水源の里への思いや本誌に関するご意見・ご感想

●プレゼント応募方法

はがきにアンケートの回答と住所、氏名、電話番号、性別を明記の上、左記(P14)宛先『水の源32号』読者プレゼント係まで応募ください。

【平成28年4月28日(木)消印有効】

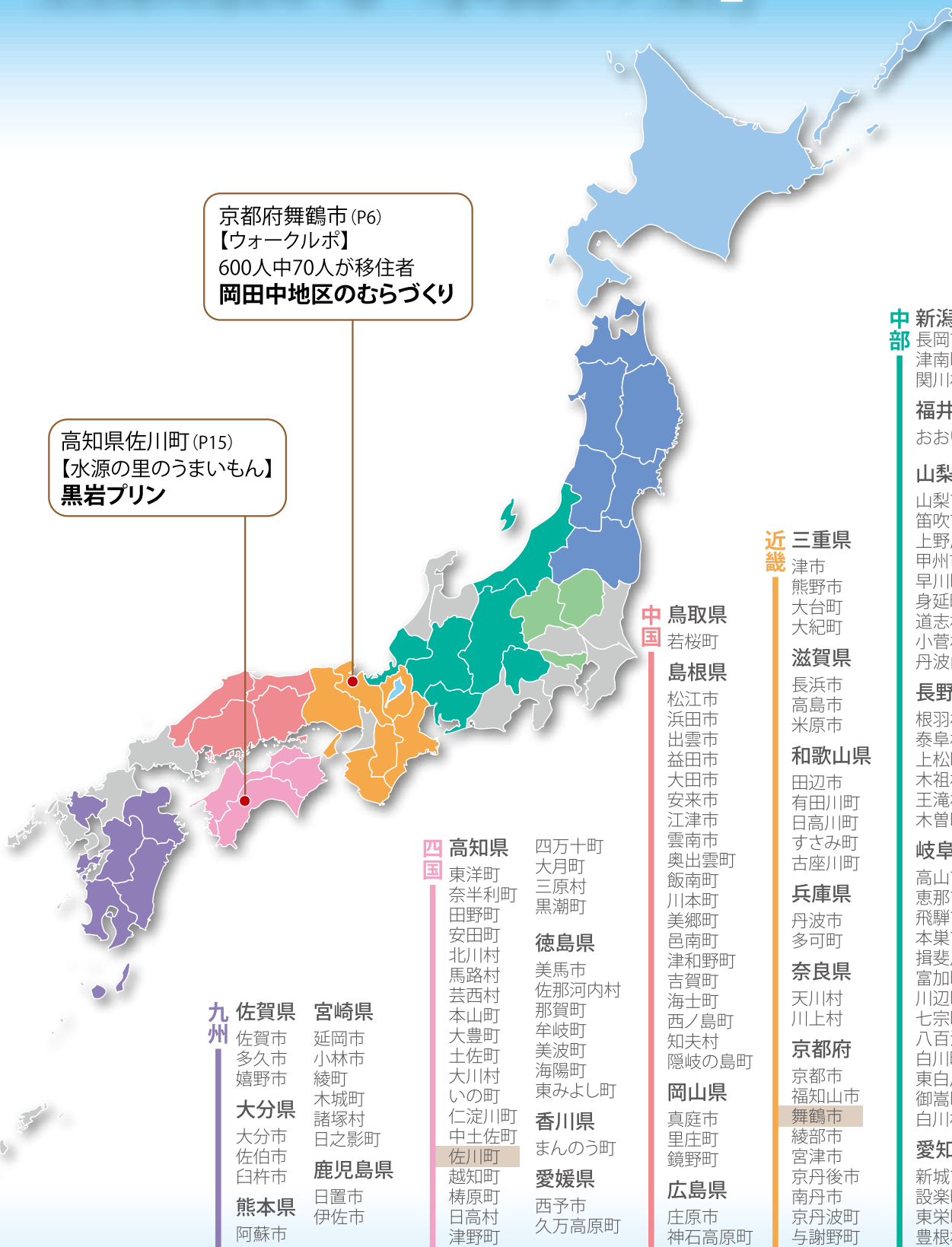
※当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。
※ご応募いただいた皆様の個人情報は、賞品発送以外の目的では使用しません。

上流は下流を思い、下流は上流に感謝する

全国に広がる「水源の里」

京都府舞鶴市 (P6)
【ウォークルポ】
600人中70人が移住者
岡田中地区のむらづくり

高知県佐川町 (P15)
【水源の里のうまいもん】
黒岩プリン



北海道
下川町
美深町
中川町
清里町

青森県
西目屋村

岩手県

遠野市
一関市
葛巻町
西和賀町

宮城県

七ヶ宿町
富谷町

秋田県

東成瀬村

山形県

小国町
飯豊町

福島県

喜多方市
相馬市

下郷町
南会津町

北塩原村
西会津町

磐梯町
猪苗代町

柳津町
金山町

昭和村
矢祭町

川内村

栃木県
日光市

群馬県

上野村
南牧村

みなかみ町

東京都

檜原村
奥多摩町

中部

新潟県
長岡市
津南町
関川村

福井県

おおい町

山梨県

山梨市
笛吹市

上野原市
甲州市

早川町
身延町

道志村
小菅村

丹波山村

長野県

根羽村
泰阜村

上松町
木祖村

王滝村
木曾町

岐阜県

高山市
恵那市

飛騨市
本巣市

揖斐川町
富加町

川辺町
七宗町

八百津町
白川町

東白川村
御嵩町

白川村

愛知県

新城市
設楽町

東栄町
豊根村

近畿

三重県

津市
熊野市

大台町
大紀町

滋賀県

長浜市
高島市

米原市

和歌山県

田辺市
有田川町

日高川町
すさみ町

古座川町

兵庫県

丹波市
多可町

奈良県

天川村
川上村

京都府

京都市
福知山市

舞鶴市
綾部市

宮津市
京丹後市

南丹市
京丹波町

与謝野町

中国

鳥取県
若桜町

島根県

松江市
浜田市

出雲市
益田市

大田市
安来市

江津市
雲南市

奥出雲町
飯南町

川本町
美郷町

邑南町
津和野町

吉賀町
海士町

西ノ島町
知夫村

隠岐の島町

岡山県

真庭市
里庄町

鏡野町

広島県

庄原市
神石高原町

四国

高知県

東洋町
奈半利町

田野町
安田町

馬路村
芸西村

本山町
大豊町

土佐町
大川村

いの町
仁淀川町

中土佐町
佐川町

越知町
梶原町

日高村
津野町

四万十町
大月町

三原村
黒潮町

徳島県

美馬市
佐那河内村

那賀町
牟岐町

美波町
海陽町

東みよし町

香川県

まんのう町

愛媛県

西予市
久万高原町

九州

佐賀県

佐賀市
多久市

嬉野市

大分県

大分市
佐伯市

臼杵市
熊本県

阿蘇市

宮崎県

延岡市
小林市

綾町
木城町

諸塚村
日之影町

鹿児島県

日置市
伊佐市

水の源 第32号

企画・発行：▲全国水源の里連絡協議会

発行日：平成28年3月

編集：「水の源」編集委員会

私たちは水源の里を応援します!!

全国環境整備事業協同組合連合会

一般社団法人 全国浄化槽団体連合会

全国森林組合連合会

全国農業協同組合連合会

電気事業連合会

独立行政法人 水資源機構

公益社団法人 大分県薬剤師会